

常識の境界¹⁾

石井 徹 (島根大学法文学部)

A boundary of common sense

Tooru ISHII (*Faculty of Law and Literature, Shimane University*)

The purpose of this research is to search for the boundary between common sense and the lack of common sense. The same investigation was repeated four times for three years about four events ("Kiss", "Meal", "Chat", and "Portable telephone"). In each investigation, a similar questionnaire was used that described 15 situations about each of four events. Three groups of students were asked to fill in the extent to which they thought an individual situation to be strange. Dendrograms by the hierarchical cluster analysis showed constantly the figure with two cores about "Kiss" and "Meal". They also showed constantly the figure of one core about "Chat" and "Portable telephone". The former was judged to be a type with a clear boundary. As for the latter, some possibilities were discussed.

Key words: common sense, boundary, social representation, sixth sense, dendrogram
キーワード: 常識、境界、社会的表象、第六感、デンドログラム

問 題

Fletcher (1984) は常識を3つのカテゴリーに分けた。(1) 誰もがもっている同一の基本的な前提一式、(2) 一組の格言あるいは誰もが同じように信じていること、そして(3) 誰もがもっている同じ考え方である。常識の常識たるゆえんを「誰もがもっている同じ (shared)」ものやことにおいた分類である。同じく Schwieso (1984) は常識に(1) だれもがもっている同じ感覚、(2) 日常的な知性、(3) 良識、そして(4) だれもがもっている同じ意見という4つの側面を想定する。Fletcher (1984) の分類とは「誰もがもっている同じ」ものやことという点では同じだが、「よい」ことや感覚としての側面まで視野に含める点が異なっている。

Garfinkel (1963) が指摘するように、これらはふだんほとんど自覚されることのないまま、我々の思考や行動に影響を及ぼしている。したがってあらためて問われても、我々はとっさにそれを表現できないことが多い。さらに自覚を促されても、他の常識の存在や論理的、機能的に可能な他の選択肢を考えることはむずかしい。

常識がもっているこのような厄介さに対して、まずエスノメソドロジーは、Schutz (1953) や Garfinkel

(1967), Goffman (1974) などの精緻な理論的考察とともに、おもに日常言語に埋め込まれた暗黙の諸前提、すなわち常識の洗い出しをおこなってきた。例えば、常識とそれにとらわれることの弊害を指摘する山田と好井 (1991) や日本人の謙遜を対人関係における一種の儀式として描き出す Hall & Noguchi (1995) に示されるように、そこではふだん自覚することのないその内容の吟味とともに、無自覚であることの効用と弊害が論じられてきた。

また心理学においては、特に社会心理学において、その大半が常識的推論過程の研究をおこなってきた。すなわち Kelly (1992) は、Heider (1958) の naive psychology を常識を研究する心理学と位置づける。これにしたがえば、それをはじめとする多くの領域と研究はすべて何らかの形で常識を研究してきたということになる。その中には Asch (1958) の同調実験や Latané & Darley (1970) の援助行動の実験、Milgram (1974) の権威への服従の実験のように文字通り常識的には驚くような推論過程も明らかになった。しかしそれがどんな内容であってもそこで明らかにされたものが、我々の常識すなわち誰もがもっている諸前提であり、誰もがもっている推論過程であること、そしてその研究であることは、科学としての心理学の論理性と実証性、結果の再現可能性の高さが、そうでないものを淘汰することによって保証してきた。ただこの間、作業の中心はやはりその洗い出し、すなわち個々の常識的前提や常識的推論過程の詳細な描出であった。常識の研究とは明示しないこれらの研究には例えば膨大な数の態度研究も含まれて

1) 本研究の結果は、一部を日本行動計量学会第27回大会(1999年、於:岡山大学)において、また一部を日本心理学会第61回大会(1997年、於:関西学院大学)において発表した。本稿の作成に際しては、主査林文先生(東洋英和女学院大学教授)をはじめ匿名の審査者お二方から有益な指摘や批判を数多くいただいた。ここに記して謝意を表す。

いる。その数に比べれば常識の研究と銘打ったものはわずかしかないが、そこにおいても同様に、ほとんどが常識の内容描写に焦点をあててきた。例えば Siegfried (1994) は常識研究の集大成の一つであるが、ここに収録された16編の論文もその例外ではなく、少なくとも8編は言語行為に現れる常識を描いている。

しかしそれだけでよいであろうか。従来の多くの研究が志向してきた常識の描写という方向が心理学や日常生活にとって有効かつ重要であることは論を待たない。しかし他との比較による特性の探求という理解の仕方また同様に有効かつ重要と考える。

すなわち、先に述べた流れとは別に、異端の受容過程という視点から常識化のプロセスを描き出そうとするもう一つの流れがある。Moscovici (1981) にはじまる社会的表象の研究や Moscovici & Faucheux (1972) などの集団におけるマイノリティ・インフルエンスの研究、集合現象としての流行や普及過程の研究は、日常に侵入する異端がそのまま大勢となって日常になるか、あるいは逆に日常に同化吸収されてしまうかという焦点の置き所に違いはあるものの、いずれも非日常的 (unfamiliar) で新奇な (novel) 事象が日常的になる過程に注目する。

そしてこの延長上に常識の比較という視点がある。例えば文化人類学において多く見られる異文化の描写は、研究者のおかれた文化との比較という視点で眺めることができる。同じくその対象をサブカルチャーに求めるならば、例えば暴走族の実態を内側から描いた Sato (1991) のように、社会学との境界領域にも同様の視点を見つけることができる。社会心理学においても Pepinsky (1994) や北山 (1997) は文化比較の重要性や有効性を指摘する。日常生活における推論過程 (常識) と科学的心理学の推論過程を比較する Furnham (1994) も異文化比較の一つとしてここに含めることができよう。これらの研究の焦点は、それぞれの文化やサブカルチャーのもつ個性と共通項を選び分け、吟味することにある。

その際、その個性を強調する研究と共通項を強調する研究の2種類が生じること、さらに前者の研究が多くなることは容易に予測できる。日常生活において我々は異すなわち変化に対して、同すなわち変化のない状態よりも圧倒的に多くの注意を向ける。見知らぬものごとにくわしたときの個人差を研究する Sorrentino & Roney (2000) に象徴されるように、これについては研究者も例外ではない。ただし例えば援助行動の研究がそうであったように、衝撃的な異をきっかけとして、より日常的な事象へと研究の対象が移行してゆくのも自然な流れの一つといえる。

本稿で提案するのは、この異文化比較の視点を日常的な事象へと延長するものである。すなわち文化というマクロな位置から (1) 日常生活というミクロの位置へ視点

を移す。その際、それが常識であることを前提としてその内容を描くのではなく、(2) 日常生活の常識をすぐ隣に接する非常識との対比を通して描き出してみたい。先にも述べたように日常生活において常識に気づくことは少ないが、非常識や変なできごとには我々は目ざとい。身近な非常識は比較対象の一つとして有望と考える。文化 (比較) という視点を日常生活に移すことは、元にもどるかに見えるが、比較というもう一つの視点の導入によって従来の研究とは異なった常識の一面を見出せると考える。

常識の比較相手として非常識を選ぶことについては先例がある。常識をその欠落から探るべく Blankenburg (1969) は、精神分裂病と診断されたにもかかわらず内省能力を保持している人々に焦点をあてた。しかし非常識は日常生活においてもごく身近に、そして豊富にある。Garfinkel (1963) は常識を壊すことによって被験者の眼前に非常識を出現させた。Gillick (1985) は医者と患者の間に病気と健康に関して常識のずれのあることを見いだした。口に出すかどうかはともかく、互いに相手を非常識呼ばわりする場面である。

さらに Parkinson (1990) は示唆に富んでいる。Parkinson (1990) は二人一組で相手の思った感情をあてっこするというゲームを考案し、あてる側が考え出す質問の項目分類を通して感情の常識を描こうとした。思い描く感情は与えられた感情のリストにのっている20個の中からそのつど任意に選んだ一つである。相手が思い描いている感情を質問者はできるだけ少ない質問であてる。たずねられる側は「はい」か「いいえ」しか答えない。役割を交代しながら22人の学生が30分間に発した質問は106個だった。次に15人の大学院生が質問のそれぞれについてそれが指している感情にどの程度ふさわしいかを評定した。この結果をクラスター分析にかけたところ、特徴、その結果、原因の3つのカテゴリーに大別できた。この研究には複数の感情の (常識の) 比較という視点と、常識を表現する項目の分類にクラスター分析を用いることの有効性が示される。

また Parkinson (1990) が参加した学生と大学院生に求めた反応には、ともに、論理的に整えられた反応だけではなく、感覚的な反応によっても常識をとらえようとした着想を見て取ることができる。この着想は、人はなぜおしゃべりをするのかを考える Toda & Higuchi (1994) の指摘とも呼応する。Todaらは、異なる文化を持つ人同士やコンピュータ (人工知能) とのおしゃべりが滑らかにできない原因として、感情の表出のしかたが合意に基づく常識 (的知識) となっていることを指摘する。この指摘は当該事象を論理以外の視点からとらえようとするとき、まず立ち現れるのが常識の壁であることを示している。常識研究の重要性とともに、その非論理

石井：常識の境界

的側面を把握するために、感覚に着目することの必要性を確認する指摘という。

このように本稿の視点は従来の研究の着想を広げ組み合わせたところに位置するが、その先例となる常識の研究はわずかしかない。このような視点が従来あまり見られなかったことについては、まず「常識は一つ」という暗黙の前提があったのではないと思われる。そのような自覚はなくとも、例えば Smedslund (1994) が指摘するように、(常識的な) 当該仮説と機能的・論理的に等価な別の仮説を考えつかない、あるいは考えないことにその存在をうかがうことができる。しかしこの前提は、先にも述べたように異文化比較や常識の比較によって容易にくつがえる。

次にはやはり方法上のむずかしさがあげられる。すなわち非常識は一つではない。文化比較というレベルではなく、ごく身近な日常生活のレベルに限定すれば常識は一つかもしれない。しかし非常識は無数に、そしてちょっとした非常識からとほうもない非常識まで様々な程度で存在する。言葉を換えれば、日常生活の常識は、水中の気泡のように、無数の様々な非常識によってその輪郭を保っている。

そして特に曖昧なのがその境界付近である。常識と非常識の境界を探るにはその目盛りとして境界付近の事例を選び出す作業が必要になる。しかしここでは、ご近所のつきあいから民俗の歴史まで広く示されるとおり、境界線の押し合いが絶えることなく続いている。したがって境界付近の事例を選び出すのは微妙な作業であり容易ではない。あるいは選び出した非常識や常識が境界付近のものなのかどうかを客観的に評価することすらこれまでは困難であった。例えば社会的表象の研究がおなじみではない事象に焦点をあて強調してきたのは、この困難を回避するためだったという見方もできる。

このような状況において本稿では二つの突破口を提案する。一つは変 (strange) の程度という指標の導入であり、もう一つは常識の置き換えと混合である。

例えば Garfinkel (1963) に描かれるように、非常識と出会ったとき我々はまず驚く。しかる後、好奇心を持って接近するか、不安によって回避するか、自分が動くか相手を動かすかなどの選択をおこなう。どの場合も発端は驚きであり、「変」という違和感である。よきにつけ悪しきにつけ、明らかな非常識でなくとも、ふつうではない、すなわち「変」と感じられたものはその瞬間に我々の目を引く。そしてこの感覚は誰もが同じようにもっている (common) ものだからこそ、コミュニケーションや社会がうまく機能する。

他方、変の程度という指標の導入は、常識あるいは非常識そのものの内容ではなく、その関係に注目することを意味する。本稿がこの視点をとるのは次の理由による。

すなわち何を常識とし何を非常識とするかは、つまり常識と非常識の内容については、古今東西において様々と思われる。しかし、事象のある様態を常識のうちと判断するか、非常識 (常識はずれ) と判断するか、という常識の感覚はどの時代、どの地域においても普遍的に存在したと思われるからである。Schwieso (1984) の指摘の通り、常識は、どんな事象についてもそのあるべきふつうの様態とそうではない変な様態とを見分ける感覚という一面を持っている。この感覚は Schutz や Garfinkel のいうとおり間主観的であり、個人の視点からは五感に次ぐ第 6 番目の感覚と見ることもできる。

感覚としての常識について本稿が目にするのは、連続的に変化する事象の様態に対する感覚の非連続性である。光の波長のうへでは連続しているにもかかわらず、虹を七色と見てしまう我々の感覚は日常生活の様態にもあてはまる可能性が高い。事象に即して見ればふつうからとても変まで様々な様態がありうるにもかかわらず、我々は、その「変」の程度に応じて、あるものを常識、あるものを非常識と分類していることになる。その基準と境界はどこにあるのだろうか。

経験的には、常識と非常識の境界は我々の生活に密接に関わっている。新しい商品や作品の開発の場においては、そして芸術や学問の分野においても、新しくなければ注目されない、新しすぎても敬遠される、というジレンマがある。また立場を変えてみれば、我々には一方でふつうを望む気持ちともう片方で変化を望む気持ちの両方がある。マンネリは安心と退屈の両方を含んでいる。人はどのようなときにどの程度の変化を望むのか。マンネリを望む気持ちは保守化を進める。マンネリを厭う気持ちは変化、革新を望むものの、変わりすぎにはついてゆけない。さじ加減が大切といいながら、特に社会的な事象についてそれはどのように表現されるのであろうか。

この問いに対して本稿では、常識の置き換えという発想とそれに基づく常識の混合という方法を提案する。常識の置き換えは A という事象の常識を B という事象に当てはめてみるという発想である。A と B とともに身近な事象にすることで、置き換えたときに突拍子もない非常識の可能性があるを低くすることを期待する。具体的には本稿では食事の常識とおしゃべりの常識を混ぜ合わせた。できるだけ機械的に混ぜることで、研究者の常識が自覚のないまま混入するという Smedslund (1994) の懸念を多少とも減らせると考える。

感覚としての常識に関しては、特に実証的には、まだ基礎的なこともわかっていない。本稿では特に常識の静態を、常識と非常識の境界に注目することを通して考える。経験的には存在すると思われるその境界を一連の調査結果によって描き出す。

方 法

目的 身近な事象の常識を混合することによって、非常識との境界を探る。焦点は常識や非常識の内容ではなく、その境界の検出である。

概要 キス、食事、おしゃべり、携帯電話の4つの事象について足かけ4年度にわたって調査した。予備調査によって設定した15の状況についてそれぞれの事象ごとに変の程度を問うた。

4つの事象 ここで用いた事象は、キスをきっかけとして選んだ。この調査を企画した当時「人前でのキス」が一部で話題になった。おなじみではあるけれど日常的とはいえないこの事象について調べる際に、その比較対象として、おなじみでしかも日常的な事象として食事を、おなじみではなく日常的でもない事象として当時普及し始めた携帯電話を、そして携帯電話に比較可能な、おなじみで日常的な事象としておしゃべりを選び出した。その際、例えばおしゃべりのように男女間で認識に違いが予想されるものは避けるように留意した。

調査時期 第1回調査、1997年1月。第2回調査、1997年4月。第3回調査、1997年7月。第4回調査、1999年6月。

調査対象者 筆者の講義に参加した大学生。分析の対象としたのはのべ482名。第1回、31名（男性11名、女性20名）。第2回、155名（男性97名、女性58名）。第3回、129名（男性72名、女性56名、不明1名）。第4回、167名（男性83名、女性84名）。第1回調査の対象者は予備調査の対象にもなった。また第2回調査と第3回調査は、同じ講義の中で実施したものであり、多くの学生が重なって参加した。調査はすべて匿名でおこなったため、重なりを特定するのは困難であった。また調査対象者の年齢は調査実施時において、主に17歳から19歳であった。

調査方法

質問項目 表1に使用した15の項目を示す。各項目はどれも当該行為がおこなわれる状況を描いたものであり、第1回調査の直前におこなった2度の予備調査（のべ92項目）の結果をもとに設定した。その際、4つ

の事象のふつう（と思われる）様態が必ず含まれること、できるだけ少数に限定することに留意した。項目を少なくしたのは回答時の感覚の鈍磨を少しでも避けるためである。どの調査においてもキス、食事、おしゃべり、携帯電話の4つの事象のそれぞれについて、この15項目を問うた。

教 示 1. 第1回～第3回調査；「もしあなたの周りでこんなことをしている人がいたら、どのくらい変だと思いますか、あるいはふつうだと思いますか。」2. 第4回調査；「もしあなたがこれをしているところを周りの人が見たら、どのくらい変だと思うと思いますか、あるいはふつうだと思うと思いますか。」

教示2は態度調査に関する Noelle-Neumann (1982) の「ヤジテスト」とその修正版である「陰口テスト」にヒントをえたものである。その公共性や個人の行動への影響のおよぼし方を考えるならば、他者評価の認識は、常識に対して、態度以上に有効な指標になると考える。またこの設定によって、その行為を目の当たりにしたときの、評定者自身の評価を問うた教示1との比較を意図した。

またどの場合も、どうしても答えにくい項目については、無理に答えなくてもよい旨を付け加えた。匿名とはいえ、事象や項目によって回答者のプライバシーにかかわる可能性とそれに基づく回答への抵抗を考慮した。

回答方法と得点化の方法 選択肢は、変じゃない、少し変、かなり変、とても変、case-by-case、および無回答の6つである。前4者を1から4に得点化し、分析の対象とした。残り2つは欠損値として分析から除外した。

分析方法 階層クラスター分析による項目分析をおこなった。そこで描き出されるデンドログラムのパターンを比較する。分析には SPSS for Windows Release 6.1.3 と Release 7.5.1 J を用いた。どの分析においてもクラスター化の方法はグループ間平均連結法を、測定方法は平方ユークリッド距離を採用した。

クラスター分析による項目の分類をおこなったのは、まず反応パターン（反応プロファイル）による分類を望んだためである。その存在をも含めて客観的な評価基準が

表1 使用した15の状況の一覧

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1. 部屋の中で、歩きながら○○ | 9. 人中で○○ |
| 2. 部屋の中で、すわって○○ | 10. 明るいところで○○ |
| 3. 部屋の中で、横になって○○ | 11. うす暗いところで○○ |
| 4. 戸外で、歩きながら○○ | 12. 暗闇の中で○○ |
| 5. 戸外で、すわって○○ | 13. 静かなところで○○ |
| 6. 戸外で、横になって○○ | 14. 騒々しいところで○○ |
| 7. ものかげで○○ | 15. にぎやかなところで○○ |
| 8. 人前で○○ | |

石井：常識の境界

不明確な段階において、また個人差や状況の影響による誤差の混入も考えられることから、項目ごとの代表値による分類は二義的なものと考えた。安定して常識の枠内と判断される項目と安定して非常識の枠内と判断される項目の間にある「揺れる」項目やそこから類推される境界を探るのが本稿の第一の目的である。具体的には、概念的には連続量と考えられる「変」の程度を指標として不連続な分布の存在を探ることを主たる目的とした。因子分析等によって、変という感覚の多様な側面を探ること自体は興味深い、本稿では考えなかった。一つには、項目によっては0分散が大いに予想されたためである。だれがいつみても「変じゃない」と評価される項目は大いにあり得るし、一つの基点としてリスト内にその存在を確認することも必要だと考えた。

結果の表示に再尺度化 (rescaled) されたデンドログラムを用いたのは、まず視覚に訴えるその表現法である。常識と非常識の境界が存在するならば、それを直接的に見せてくれる表現方法だと考えた。また標準化されていることによって、個々の集団の特性や実施時の状況に基づく反応の個性を消し去り、調査間ならびに集団間の比

較を容易にすると考えたためである。

ただしこのために、分類対象の15項目の中に1個でも欠損値を含むケースは、残らず分析から除外されることになった。その結果、個々の項目が含む欠損値の数よりも多くのケースが除外された。

結果と考察

結果の多さがもたらす煩雑さと冗長さを避けるために、本稿では主に食事とおしゃべりに対する結果を報告し、それをもとに考察する。キスと携帯電話については第4回の結果を用いる(載せきれなかった結果については別途配布する用意がある)。

常識の境界 図1から図4-1は、第1回から第4回までの食事に対する15項目の分類結果である。各項目の横には変の程度の平均と標準偏差をつけた。それぞれの値はそのクラスター分析に含まれたケースを集計した。クラスター分析と同様に、該当する15項目に1個でも欠損値を含むケースは含まれていない。平均値はそれぞれ高い項目ほど変に思う、あるいは変に思われると思うことを示している。さらにその右側にデンドログラムを

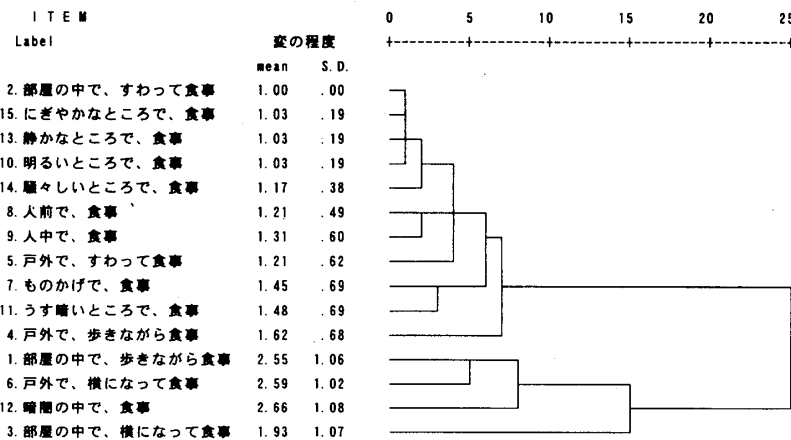


図1 第1回調査における食事の「ふつう」(1997/1 rescaled: 29/31 cases)

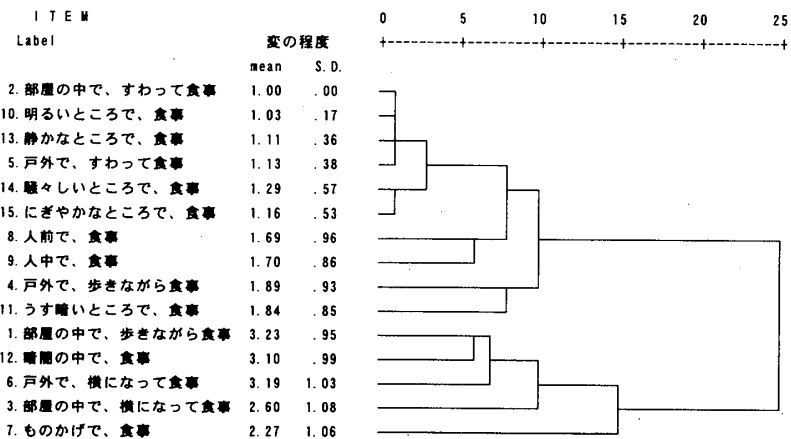


図2 第2回調査における食事の「ふつう」(1997/4 rescaled: 70/155 cases)

社会心理学研究 第16巻第3号

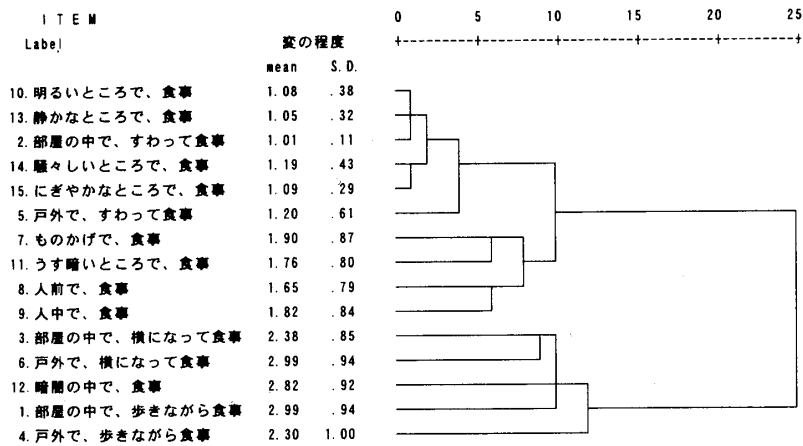


図3 第3回調査における食事の「ふつう」(1997/7 rescaled: 79/129 cases)

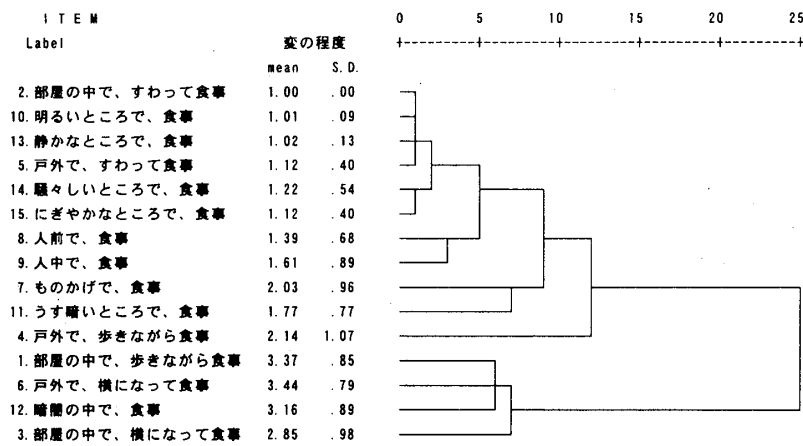


図4-1 第4回調査における食事の「ふつう」(1999/6 rescaled: 117/167 cases)

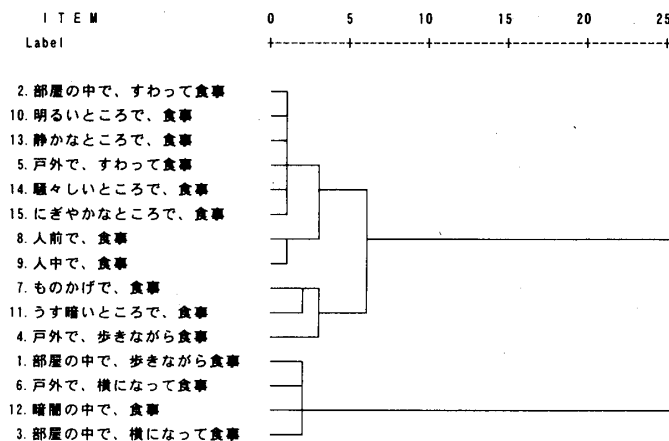


図4-2 第4回調査における食事の「ふつう」(Ward法 1999/6 rescaled: 117/167 cases)

あわせた。どの図も左から順に回答パターンの似ている項目同士が順に小さなクラスターを作り、最終的に大きな二つのクラスターになっている。これらは変の程度の平均値から、上のクラスターがふつうクラスター、下のクラスターが変クラスターと見える。後に検討するお

しゃべりや携帯電話のパターンと比較するために、本稿ではここに見られるパターンを双核型と呼ぶ。

図からは4回の調査を通じてその形に大きな変化はなく、安定していることも見て取れる。細かく見るとこの安定は異なる母集団(第1回、第2回、第4回)に

石井：常識の境界

表2 項目4「戸外で歩きながら食事」と項目7「ものかげで食事」の推移

	分類クラスターと変の程度						n	実施
	項目 4			項目 7				
	クラスター	mean	S.D.	クラスター	mean	S.D.		
第1回	常識	1.62	.68	常識	1.45	.69	29	1997/1
第2回	常識	1.89	.93	非常識	2.27	1.06	70	1997/4
第3回	非常識	2.30	1.00	常識	1.90	.87	79	1997/7
第4回	常識	2.14	1.07	常識	2.03	.96	117	1999/6

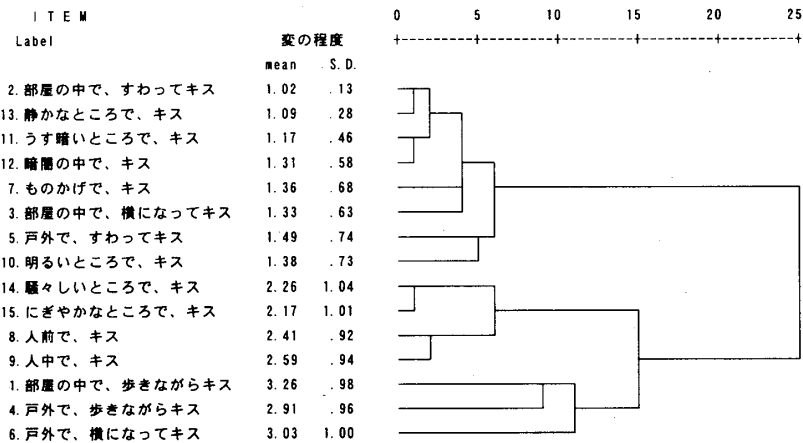


図5 第4回調査におけるキスの「ふつつ」(1999/6 rescaled: 117/167 cases)

おいても同一の母集団(第2回、第3回)においても確認できる。また同じく第4回と、第1回から第3回との間に大きな違いが見られないことから、教示の違いをこえても安定していると思われる。

またこの傾向はキス(図5)についても確認できた。すなわちキスは食事と同じ双核型であった²⁾。これは、この型がキスあるいは食事の特性によるものである可能性を低くする。キスと食事に共通の特性による可能性は残されているものの、複数の事象の比較によって境界の有無を検討しようとした本稿の意図はある程度達せられたと考える。

境界の範囲 図1から図4-1の結果を見比べると、項目4と項目7が常識と非常識の境界をこえて動いているのが見える。キスでは項目間の組み合わせが若干異なるだけでそれぞれの内容は変わらなかった。食事に対する第2回調査の結果(図2)では、項目4は第4回と同じく、ふつつ(常識)クラスターに入っている。逆に項目7は第2回調査では変(非常識)クラスターに、その他の回ではふつつ(常識)クラスターに入っている。

2) このパターンも4回の調査を通じて変わらなかった。キスと携帯電話についての第3回までの結果は日本心理学会第61回大会(1997年、於：関西学院大学)のポスターセッションにおいて発表した。

第2回と第3回の調査は同じ集団に実施したものであり、これらの項目は集団内でも常識と評価されたり非常識と評価されたりしていることになる。表2はこのことを4回分まとめたものである。横には変の程度についての平均値と標準偏差、およびこれらの算出に用いたケース数を併記した。

表2において明らかのように、第1回調査の変の程度は他に比べて低かった。この回の評価は他の項目についても一様に低かった。クラスターの形は図1に示すように第4回のパターンとよく似た形になった。項目4の関わり方も常識のもっとも外側で関わるという同じパターンである。項目7も項目8・9・11とともにほぼ同じ位置を占めている。第1回の集団は全3回にわたる予備調査に参加しており、変の程度を評価する際、慣れによって全体に控えめにするようになったのではないかと考える。したがってそのような慣れのない第2回以降の調査結果が、相対的に自然な結果ということになる。

これを前提として、表2から次のことが読みとれよう。まず食事についての常識と非常識の境界は変の程度2.14から2.27のあたりにもとめられる。概念的には連続量なのに、そして他方において連続的な変化を示すおしゃべりや携帯電話といった事象がありながら、食事の場合、常識と非常識に不連続点つまり境界があり、それ

がこのあたりと言いうる。さらに図5からはキスについては変(非常識)クラスターの下限が2.17であり、先の食事の境界値と合わせて、その幅を2.14から2.17の間に絞り込むこともできそうである。

しかしこの境界の値は一応の目安と見るほうがよいと考える。第一に、境界の値や幅が事象をこえて同じかどうかはまだ検討されておらず、今後の検証を待たねばならない。第二に同じ事象においても変の程度の評価に際して、寛容あるいは鈍感になったり敏感になったりすることが経験的には知られている。本稿においても第1回の調査とそれ以降の調査において示されるとおりである。少なくとも食事やキスについては、常識と非常識の境界があり、変の程度を指標として見当はつけられるものの、安定した値の存在の有無、あるいはその変動の特性は今後の検討課題として残される。また変の程度だけでは、特定の様態が常識に属するか否かは現時点では判定できない。その程度が境界の値をこえているかどうか重要になる。

そしてその値をこえなければ、少々変な行為でも常識の中に入りうる。変の程度がさきほどの数値をわずかで

もこえると非常識のクラスターに入るが、それをこえなければ、常識のクラスターにとどまることができる。項目4は常識クラスターの中にあるときはもっとも外側に位置するが、それでも常識に入っている。常識の柔軟性を示すと考えられる。

経験的には、常識は特にその境界近くの様態については、それまで常識と見ていた様態を非常識とし、非常識と見ていた様態を常識としうる可塑性、あるいは柔軟性を持っていると考えられる。項目4と項目7のクラスター間移動はそれを具体的に示す一例と考えることができよう。

単核型の携帯電話 しかし食事やキスとは対照的に、双核型はおしゃべりと携帯電話については明確には見いだせなかった。すなわち図6から図9-1に見えるようにおしゃべりの結果は切れ目なく一つのクラスターに収斂している。この傾向は携帯電話(図10)についても確認できた。携帯電話はおしゃべりよりも明確な単核型であった²⁾。この型には、変だけど非常識とは判定できない様態が、きわめてふつうの様態の周りに切れ目なく広がっている。

ITEM Label	変の程度	
	mean	S. D.
8. 人前で、おしゃべり	1.03	.18
15. にぎやかなところで、おしゃべり	1.03	.18
9. 人中で、おしゃべり	1.00	.00
10. 明るいところで、おしゃべり	1.00	.00
2. 部屋の中で、ずわっておしゃべり	1.00	.00
4. 戸外で、歩きながらおしゃべり	1.00	.00
5. 戸外で、ずわっておしゃべり	1.07	.37
3. 部屋の中で、横になっておしゃべり	1.10	.31
14. 騒々しいところで、おしゃべり	1.10	.40
7. ものかげで、おしゃべり	1.20	.41
11. うす暗いところで、おしゃべり	1.13	.35
12. 暗闇の中で、おしゃべり	1.37	.61
13. 静かなところで、おしゃべり	1.30	.75
1. 部屋の中で、歩きながらおしゃべり	1.60	.97
6. 戸外で、横になっておしゃべり	1.60	.77

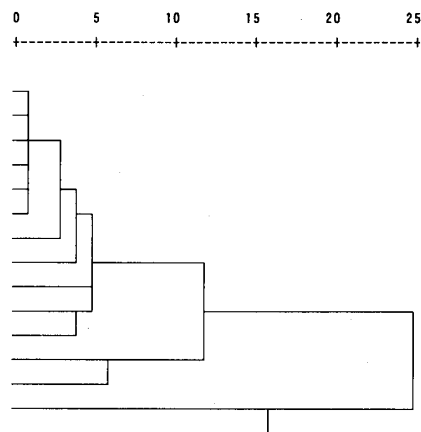


図6 第1回調査におけるおしゃべりの「ふつう」(1997/1 rescaled: 30/31 cases)

ITEM Label	変の程度	
	mean	S. D.
4. 戸外で、歩きながらおしゃべり	1.00	.00
10. 明るいところで、おしゃべり	1.00	.00
2. 部屋の中で、ずわっておしゃべり	1.01	.12
15. にぎやかなところで、おしゃべり	1.03	.17
5. 戸外で、ずわっておしゃべり	1.09	.29
14. 騒々しいところで、おしゃべり	1.15	.36
9. 人中で、おしゃべり	1.22	.55
13. 静かなところで、おしゃべり	1.25	.53
8. 人前で、おしゃべり	1.30	.60
3. 部屋の中で、横になっておしゃべり	1.37	.60
11. うす暗いところで、おしゃべり	1.36	.64
7. ものかげで、おしゃべり	1.58	.78
12. 暗闇の中で、おしゃべり	1.78	.95
1. 部屋の中で、歩きながらおしゃべり	2.30	1.07
6. 戸外で、横になっておしゃべり	2.28	1.01

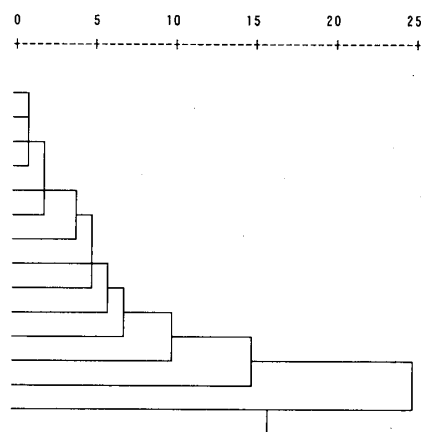


図7 第2回調査におけるおしゃべりの「ふつう」(1997/4 rescaled: 67/155 cases)

石井：常識の境界

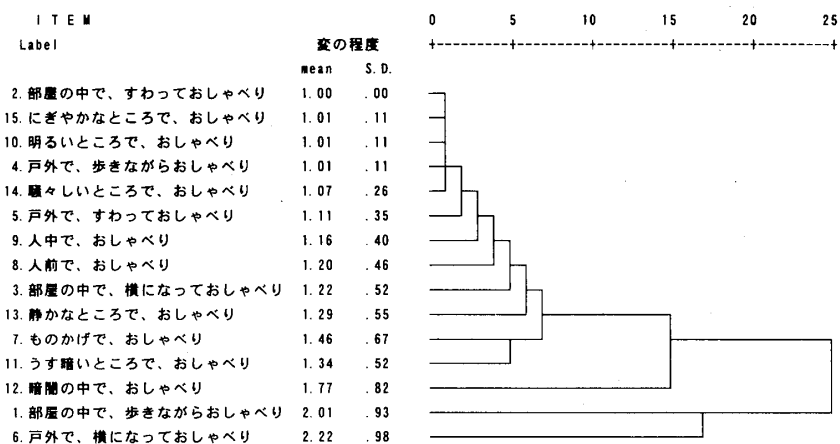


図8 第3回調査におけるおしゃべりの「ふつう」(1997/7 rescaled: 83/129 cases)

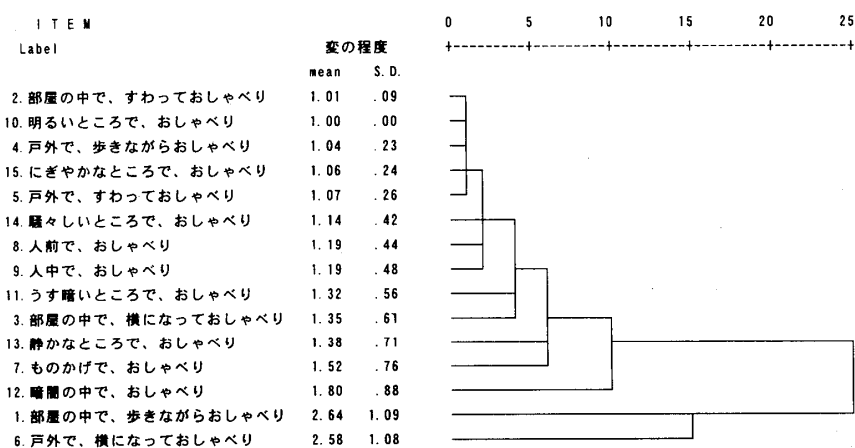


図9-1 第4回調査におけるおしゃべりの「ふつう」(1999/6 rescaled: 113/167 cases)

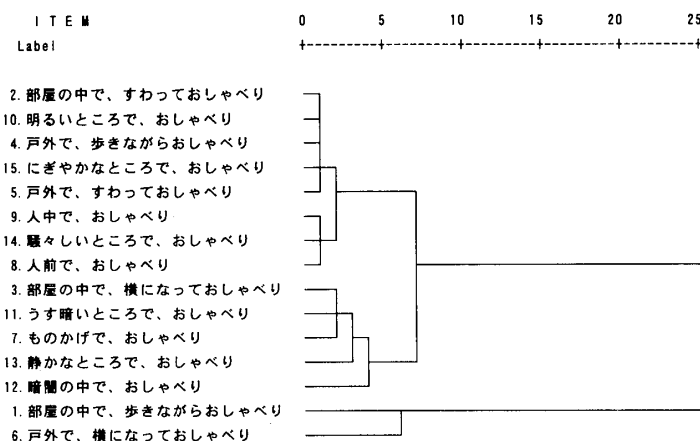


図9-2 第4回調査におけるおしゃべりの「ふつう」(Ward法 1999/6 rescaled: 113/167 cases)

このことはまず、我々の周界には常識と非常識が明確に分かれる現象（双核型）と、その境目がない現象（いわゆる単核型）があることを示している。この調査期間における携帯電話の特徴からは、単核型は非日常的な事象に特有のパターンという可能性が示唆される。

この調査を始めた1996年当時は機器が広く普及し始めた頃であり、まだポケット・ベルの利用者のほうが圧倒的に多かった。他方1999年に第4回の調査をおこなった一カ月後に機器の普及台数が据え置き電話の加入台数に追いつくという予想が報じられた。また第4回

社会心理学研究 第16巻第3号

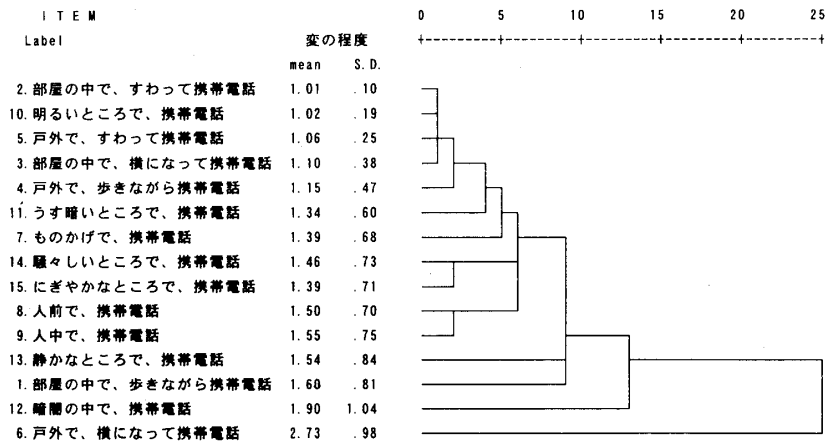


図10 第4回調査における携帯電話の「ふつう」(1999/6 rescaled: 109/167 cases)

表3 欠損値(無回答)の多い項目

(n)	食 事				おしゃべり			
	最 多	第2位	第3位	第4位	最 多	第2位	第3位	第4位
第1回(31)	6(1)*	8(1)	—	—	6(1)	—	—	—
第2回(155)	8(32)	9(31)	4(26)	3(22)	6(41)	1(29)	12(29)	13(25)
第3回(129)	9(20)	4(19)	8(19)	14(17)	12(21)	9(17)	6(16)	13(16)
第4回(167)	4(17)	11(16)	9(15)	8(14)	6(21)	13(18)	12(12)	8(11)

* カッコ内は度数

の調査対象者の間では持っていないものは8人に一人という状況であった。石井(1999)に示すように、携帯電話は今後、適切な使い方の議論を通してふつうの使い方が模索され、したがってその反面では変な使い方が定まってゆくはずの事象と考えられる。今後多角的な観察を続けることで、ルールや常識の形成について興味深い知見が期待できる。その時には双核型が見いだされる可能性もなしとしない。ただしこのような推論の流れからは、おしゃべりはすでに双核型を示すはず、という結論が導かれる。これは次に検討する欠損値の出現度数からも示唆されることから、後に別項を設けて考えてみたい。そこではおしゃべりや携帯電話に双核型が明確に見られなかったことの原因として、本稿で用いた15項目の限界を検討する。

case-by-case と無回答について 欠損値として扱った反応のうち case-by-case はどの調査、どの事象においてもほとんどあらわれなかった。もっとも多くあらわれたのは第4回調査の携帯電話であり、項目1から項目15すべてに8人が case-by-case をつけた(項目5は9人)。このうち7人はその当時携帯電話をもっていない人たちだった。キスについては第2回調査の4人が最高であった。

これに反して無回答は多かった。表3はその出現度

数のうち、最大のものから第4位の項目までを各調査ごとに示したものである。表中では各項目番号の後ろに無回答の数を付した。特に多人数を対象とした第2回調査以降「答えにくい項目には、無理に答えなくてもよい」旨を強調した結果と思われる。

特に第2回調査以降についてまず食事について無回答の多い項目を見てみると、第2回では項目8(32名)、9(31名)、4(26名)が度数の順番にあがる。同じく第3回では項目9(20名)、4(19名)、8(19名)、第4回では項目4(17名)、11(16名)、9(15名)、および8(14名)となっており、項目8、9、11に多いことが見て取れる。デンドログラムに見るとおり、クラスター間を移動している項目4と7をのぞいて、これらはふつう(常識)クラスターの中でも相対的に変よりのクラスターを構成している。常識の中ではあるが境界付近の様態として答えにくい項目であったことがうかがえる。

同様におしゃべりについて見てみると第2回では項目6(41名)、1(29名)、12(29名)が、第3回では項目12(21名)、9(17名)、6(16名)、および13(16名)、第4回ではやはり項目6(21名)を筆頭に、13(18名)、12(12名)と第1回(表3)を含めて項目6が3度ももっとも答えにくいものとしてあげられている。第3回では1位ではないものの3位にはいって

石井：常識の境界

る。無回答の意図を、食事の例にならって、「境界付近の項目の答えにくさ」と理解すれば、項目6の付近に境界の存在をうかがうことができそうである。これはおしゃべりのデンドログラムにおいて項目1と6がつくるクラスターの解釈に対する一つの示唆と考える。

おしゃべり その行為の内容を見ると、おしゃべりは、食事やキスよりも携帯電話に近いと思われる。ここから、おしゃべりのパターンは携帯電話のパターンと同じ型になることが予測できた。結果として携帯電話が明確な単核型になったため、おしゃべりもいったんは単核型と判断した。しかしおしゃべりと携帯電話の違いに注目するとき、上に述べたように、おしゃべりにも双核型の可能性がでてくる。他方では図6から図9-1のパターンにおいて項目1と項目6の位置は、双核型の可能性を完全に否定できるほど明確ではない。このようにおしゃべりを双核型と判断するとき、本稿で用いた15項目の限界がきびすを接して見えてくる。

特に調査開始当時、携帯電話がいまだ不安定な現象であったにもかかわらず調査に加えたのは、常識と非常識の境界を探るためによりふさわしい項目を選ぶためであった。すなわち仮に境界があるとすれば、その近くの項目は、常識に属していればかなり変な常識であろうし、非常識に属していればかなり常識的な非常識になることが予想された。事象を一つに定め、それについてこのような項目を選び出すのは具体的には困難であり、自己撞着を起こす可能性が高い。

そこで考案したのが常識の置き換えと混合である。すなわち複数の事象について一方の常識を他方に持ち込むことを考えた。境界の検出において食事とキスについては、この方針とその結果選び出した15項目は成功したと思われるが、他方特におしゃべりについては充分ではなかった。

表1に明らかなように本稿で用いた15項目は状況を描写するものであった。しかしおしゃべりの場合には状況だけではなく、内容との適合性も重要であったかもしれない。池田(1993)ではこのような適合性をレリバンス(relevance)と呼ぶが、状況を固定した場合には不適切な話題が、話題を固定した場合には不適切な状況が、それぞれ変あるいは常識はずれと判断される可能性は高い。一方ではこの視点が携帯電話にも当てはまるかどうか、両者の違いを考える上で興味深い。携帯電話よりはるかに、いつでもどこでもおこなわれるおしゃべりは、やはりその分、変の程度の評価についても複雑な基準を持っていることがうかがえる。

また他方、この視点はおしゃべりが食事やキスよりも複合的な視点で変の程度を判断されることを示している。常識の静態を描くためにより単純な事象を求めた本稿の視点からは、調査の対象として、元来、不向きだったか

もしれない。

ただそれにもかかわらずおしゃべりが興味深いのは、その変が、他の事象に比べて、受け入れられる可能性が高いと思われることである。すなわち不適切な話題や、不適切な状況が、新しい状況や話題を作ろうという意図の表明としてかなり頻繁に用いられうる。好意を持っている他者との関係をいっそう改善しようという場合などに、逆の結果になることを覚悟の上で、あえて試されることがある。これはすでに作られた空間の中での行為の研究ではなく、行為によって形成される(社会的)空間の研究であり、非常識が常識になってゆく動態の研究として注目したい。

クラスター間距離について 統計学辞典(竹内, 1989)では階層的クラスター分析におけるクラスター間距離の算出法が9種類に分類されている。これらは、次に併合しようとするクラスターとの距離を算出する際に、たった今一つにしたばかりのクラスター間の距離を考慮する方法としない方法に大別できる。前者にはWard法、最小分散法、重心法、メディアン法、可変法が、後者には最近隣法、最遠隣法、群平均法、加重平均法があげられている。本稿で用いたのはグループ間平均連結法であり、後者の群平均法に該当すると思われる。後者の4つの方法の中で、群平均法はクラスター内のデータ数をそのまま距離の算出に用いている点が他の三つとは異なる。クラスター分析を含む多次元解析が比較的容易にできるようになった今日、算出に際して係数を2分の1に固定するなどの人為的な操作は、特に理由がない限り必要ないであろう。

同じ理由によって前者の5つの算出法のうちメディアン法と可変法はここでは取り上げない。残る三つのうち、石村(1998)で「迷ったときに」推奨されているWard法を検討する。図4-2は、食事についての第4回調査の結果をWard法によって分類したものである。図4-1と比較してみるとやはり二つのクラスターに大別できることが見て取れる。またWard法のほうが小さな核をたくさん生成するように見える。逆にグループ間平均連結法では少数の核を中心に層化してゆく傾向を見ることが出来る。同じ違いは、おしゃべりについて同様に表した図9-1(グループ間平均連結法)と図9-2(Ward法)についても見ることが出来る。常識と非常識の境界を探るという現在の視点からは、少数の核を中心にまとめ上げてゆくグループ間平均連結法のほうがふさわしいと考える。単核型があらわれやすい方法で双核型やあるいはそれ以上の多核型がなおあらわれるならば、その結果は逆に重視せざるを得ない。

総合的考察

常識に従って行動することはわが国独自ののものである

うか。Garfinkel (1963) による限りそのようには思われ
ない。また常識の中には池田(1993)が指摘するように、
倫理的な理由やそれがもたらす弊害の大きさから破棄さ
れるべき、事実と合わない常識的知識や信念 (belief) も
ある。しかし例えば子育てや教育の場において、成人間
ではわざわざ口にしない常識がいかに多くあることか、
そしてそれを一つ一つ子供や新入生あるいは新入社員に
説くことがいかに根気のいる面倒な作業かを実感するこ
とができる。Garfinkel (1963) が逆説的に示したように、
これらの多くが、語られないがゆえに、効果的に日常を
支えている。本稿で考えるのはこのような常識である。

今後検討すべき点は多々あるものの、本稿の結果は常
識の静態についてあり得べき二つの典型を示したと考
える。すなわち双核型と単核型である。前者は常識的な
様態群と非常識な様態群との間が不連続で境界を明確に
見て取ることができる。後者の単核型は二つの様態群の
間が連続的で境界が不明確である。このような二つの型
に対して、本稿と同じ方法で今後、例えば三核型などの
第3の型が見いだされる可能性は否定できない。しかし
あるとすれば、この間のどこかで、しかもある程度の
安定性をもって観察されたはずであり、そうではなかつ
た結果から、第3の型の可能性は低いと考える。

最後に本研究の抱える問題をあと2点、考えてみた
い。その第一は分析方法の問題である。本研究で用いた
デンドログラム・パターンの比較はそこに理論的な根拠
あるいは必然性はない。本稿で試みたのは、個々の行為
や反応から人の日常を描くのではなく、複数のものが含
まれるパターンから描き出すことであった。このような
視点は特に我々の動的な特徴を把握するうえで今後いっ
そう重視されるべきものと考えているが、現時点でこれに最
適な分析方法に見えたのが階層クラスター分析であった。
特に再尺度化されたデンドログラムは個々の事象の個性
を捨象し、本質の比較を可能にするように見えた。

しかし複数の事象について描き出したデンドログラム
を比較するという手法は本来の階層クラスター分析の使
い方には含まれていない。デンドログラムのパターンに
限定しても、その類似性の量化と検定の問題は今後残さ
れた大きな課題である。パターン比較の有用性と可能性
を探り、その限界を見極めるためにも、他の方法の検討
とともに今後解決されなければならない問題と考える。

他方、食事やキスのデンドログラムに示された二つの
クラスターをこのように読みとることに対して、これは
false consensus の一例ではないかという可能性が示さ
れた。すなわち食事やキスのデンドログラムに示される
二つのクラスターは、「ふだんの自分と同じ項目をふつ
うと思い、自分とは異なる項目を変えよう」というよ
うであらわれた二つのクラスターではないか。これらの現
象に関しては潜在的に二つのグループが存在し、先の結

果はそれを示しているのではないかという可能性である。
この二つのグループにふつうか変かという視点で問えば、
自らをふつう、異なるものを変えようとするであろう。

この「自分がふつうだ」という傾向は false consen-
sus と呼ばれる認知傾向である。Ross, Green, & House
(1977) では、false consensus を、自分の意見や好み、
行動について同じものを持っている人の数や割合を実際
よりも過大に見積もる傾向と定義する。自分と同じ人は
大勢いる、つまりふつうだ、という考えの脈絡である。

しかしこれはその内容に焦点を当てた議論であり、本
稿の視点とは少々ずれると考える。本稿で問題としたの
は感覚としての常識であり、その不連続であった。変の
程度の評定においては正誤 (true or false) は問えない。
またそれが常識であれ、false consensus であれ、そこ
にはたらく感覚は共通部分が多いと思われる。結果から
みても、ある事象のある様態を変えと感じる人が増えれば、
それは非常識となる。この感覚は特に間主観的であり、
人が従来持っている五感を社会的に支えるものとして位
置付けることができる。そこで問うべきは、調査結果や
実験結果の共通性 (commonality) あるいは安定性の高
さしかないのではないだろうか。特に常識の動態を考え
る際には両者の区別は無意味になると思われる。

ただし操作的には、変の程度の評定と自らの関与度と
の関連を見ることも有効であろう。変の程度の評定が
false consensus の結果であれば、その自己防衛的な傾
向 (Verhulst, 1997) によって関与度のパターンと重なる
ことが期待される。false consensus の定義に含まれる
「自分と同じ人」という点に注目する視点である。し
かし本稿で述べてきた調査ではこれを考慮していなかつ
たため、本稿の4つの事象についてこれ以上議論をつ
づけることは無益である。実証的な検証ならびに検討は
別の調査にゆだねたい。

引用文献

- Asch, S. E. (1958) Effects of group pressures upon modification and distortion of judgments. In E. E. Maccoby, T. M. Newcomb, and E. L. Hartley (Eds.), *Readings in social psychology* (pp. 174-183), New York: Holt, 3rd edition.
- Blankenburg, W. (1969) Towards a psychopathology of "common sense." *Confinia Psychiatrica*, 12, 144-163.
- Fletcher, G. J. (1984) Psychology and common sense. *American Psychologist*, 39(3), 203-213.
- Furnham, A. (1994) The psychology of common sense. In Siegfried, J. (Ed), *The status*

石井：常識の境界

- of common sense in psychology (pp. 259-278), Norwood, NJ, USA, Ablex Publishing Corp.
- Garfinkel, H. (1963) A conception of, and experiments with, "trust" as a condition of stable concerted actions. In O.J. Harvey (Ed.) *Motivation and Social Interaction: Cognitive Determinants* (pp. 187-238), Ronald Press, New York.
- Garfinkel, H. (1967) *Studies in ethnomethodology*. Polity Press.
- Gillick, M.R. (1985) Common-sense models of health and disease. *New England Journal of Medicine*, **313**(11), 700-703.
- Goffman, E. (1974) *Frame analysis*. Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.
- Hall, B.J. & Noguchi, M. (1995) Engaging in Kenson: An extended case study of one form of "common" sense. *Human Relations*, **48**(10), 1129-1147.
- Heider, F. (1958) *The psychology of interpersonal relations*. Wiley. (大橋正夫 (訳) 対人関係の心理学 誠信書房)
- 池田謙一 (1993) 「社会のイメージの心理学 ぼくらのリアリティはどう形成されるか」—セレクション社会心理学—5 サイエンス社.
- 石井 徹 (1999) 携帯電話が変えるコミュニケーション像：一人芝居のような対話 島根大学法文学部紀要 社会システム学科編, **4**, 1-16.
- 石村貞夫 (1998) SPSS による多変量解析の手順 東京図書
- Kelly, H.H. (1992) Common-sense psychology and scientific psychology. *Annual Review of Psychology*, **43**, 1-23.
- 北山 忍 (1997) 文化心理学とは何か 柏木恵子・北山忍・東洋 (編著) 文化心理学 (pp. 17-43) 東京大学出版会
- Latané, B. & Darley, J.M. (1970) *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?* Appleton-Century-Crofts, New York. (竹村研一・杉崎和子 (訳) 1977 冷淡な傍観者：思いやりの心理学 ブレーン出版)
- Milgram, S. (1974) *Obedience to authority: An experimental view*. Harper & Row Publishers, Inc. (岸田 秀 (訳) 1980 服従の心理—アイヒマン実験 河出書房新社)
- Moscovici, S. (1981) On Social Representations. In J.P. Forgas (ed.), *Social cognition: Perspectives on everyday understanding* (pp. 181-209), London: Academic Press.
- Moscovici, S. & Faucheux, C. (1972) Social influence, conformity bias, and the study of active minorities. In L. Berkowitz (ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. **6** (pp. 149-202), Academic Press.
- Noelle-Neumann, E. (1982) *Die Schweigespirale öffentliche Meinung—unsere soziale Haut*. Verlag Ullstein GmbH, Frankfurt/Main Berlin. (池田謙一・安野智子 (訳) 1997 沈黙の螺旋理論 世論形成過程の社会心理学 改訂版, ブレーン出版)
- Parkinson, B. (1990) Interrogating emotions: A dyadic task for exploring the common sense of feeling states. *European Journal of Social Psychology*, **20**(2), 171-179.
- Pepinsky, P.N. (1994) *Worlds of common sense: Equality, identity, and two modes of impulse management*. Westport, CT, USA: Greenwood Press/Greenwood Publishing Group, Inc.
- Ross, L., Greene, D., & House, P. (1977) The false consensus effect: An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 279-301. New York: Academic Press.
- Sato, I. (1991) *Kamikaze Biker: Parody and anomy in affluent Japan*. The University of Chicago Press.
- Schutz, A. (1953) Common sense and scientific interpretation of human action. *Philosophy and Phenomenological Research*, **14**, 1-39.
- Schwieso, J. (1984) What is common to common sense? *Bulletin of the British Psychological Society*, **37**, 43-45.
- Siegfried, J. (1994) *The status of common sense in psychology*. Norwood, NJ, USA: Ablex Publishing Corp.
- Smedslund, J. (1994) Non-empirical and empirical components in the hypotheses of five social psychological experiments. *Scandinavian Journal of Psychology*, **35**(1), 1-15.
- Sorrentino, R.M. & Roney, C.J.R. (2000) *The uncertain mind: Individual differences in*

- facing the unknown*. Psychology Press, Philadelphia, U.S.A.
- 竹内 啓 (1989) 統計学辞典 東洋経済新報社
- Toda, M. & Higuchi, K. (1994) Common sense, emotion, and chatting and their roles in interpersonal interactions. In Siegfried, J. (Ed). *The status of common sense in psychology* (pp. 208-244), Norwood, NJ, USA: Ablex Publishing Corp.
- Verhac, J. F. (1997) Effet de faux consensus et regulation sociale du jugement. *Cahiers Internationaux de Psychologie Sociale*, **36**, 46-61.
- 山田富秋・好井裕明 (1991) 排除と差別のエスノメソドロジー —[いま—ここ] の権力作用を解読する 新曜社
(1999年9月27日受稿, 2000年7月31日掲載決定)